

朝を  
ひらく

「法事をお願いしたいんですが、このお寺はお西ですかお東ですか？」

住職をして30余年、何度も尋ねられる質問である。「禅宗、曹洞宗です。あの永平寺と同じ……。」と答えると、決まって「うちは浄土真宗ですが、だめでしょうか」となる。

だめでしょうか、といわれてもどう答えたらいいのか。「あのう、同じ仏教ですから大丈夫だと思いますが、元はと言えば2500年前のブツダですから」というと、「どうですね、いいんですよ！」と簡単に一件落着。だが、何かおかし

永田 円了  
真国寺住職



い。宗派にこだわっているようで、実はただ何々家に代々伝わる習慣に準じているだけのこと。

私はこれからの宗教のあり方は、次のようにあってほしいと願う。一つ、宗教は家族単位から、個人が決めるものになってほしい。二つ、宗教実践の中心は、既成の宗教施設や団体よりも個人の生きる現場であってほしい。三つ、宗教理解の基準は、伝統の権威、宗派よりも個

人の経験と判断によるものになってほしい。

鎌倉仏教の道元、親鸞、日蓮は当時の形骸化していた仏教に疑問をもった改革者だった。そのエネルギーが民衆に受け入れられ、時代と共に伸びていったのである。

禅修行を終えた息子がこの4月から営業マンとしてスタートする。半僧半俗のスタイルである。私はこれがいいと思っっている。修行で得たものを世俗で活かす。宗教は教義ではなく、生き方そのものであると思うからである。

夢のiPS細胞は、雑菌が入らないよう無菌室でつくられる。しかしいったんつくられたiPS細胞は、生身の人体、雑

菌いっばいの現場に戻して活用されなければならない。宗教のあり方も同様であろう。宗派を問わず、おおよそ修行と言われるものは、世俗の雑音からいったん離れ、出家して一定の期間集中して真理を探究する。そしてそこで得たものは、各々の生活現場で活かされなければならないのである。

今、檀家制度が揺らいでいる。キリシタン排斥のため江戸幕府が制定したとされる寺請制度が、平成の世で改革が求められている。宗教は家単位から個人へ。知識より智慧優先の宗教へ。ただ信じる宗教から個人が目覚める宗教へ。宗派に枝分かれした複雑化より単純明快な真理へのパラダイム変換を願う。

仏教学者、鈴木大拙は宗教を簡潔に英語で言った。To do good is my religion.

家から個へ

宗教の概念  
変換願う